

会員

黒松内ぶなの森自然学校

栗山オオムラサキの会

員

下川自然を考える会

紹介

ふるさと美幌の自然と語る会

各地域で、独自の活動に取組む4団体をご紹介します。

町の面積の8割以上が森林で、ブナが自生する北限としても有名な黒松内町。

1998年環境庁（当時）などが進めた自然体験型環境学習拠点（ふるさと自然塾）事業の一環として設立されたのが「黒松内ぶなの森自然学校」です。元・作開小学校の校舎を拠点に活動しています。同校では「自然体験型、地域産業体験型学習プログラム事業」の推進、「自立、自律した、次代を担う人材」の育成、「子どもを中心とした地域交流促進事業」の展開を主要事業の柱としています。

主催する事業のひとつに、子ども事業（遊びを通して学ぶイエティくらぶ、長期休暇を利用するキャンプ、山村留学）があり、2005年度の自然学校利用者は、述べ5000名を超えます。これらの活動では、大人も真剣に遊びに取り組みます。そうした中で、子どもたちは自然とのふれあいを深めながら、人と人との関係をつくる力を身につけていくそうです。

その他、黒松内の豊富な自然や地域の人と触れあうエコツアーや人材育成や研修事業、各種講演など活動は幅広く、楽しくためになる行事のファンが年々増えてきています。

自然学校運営委員長の高木晴光さんは黒松内の良さをこう語ります。「ここには山があって、森があって、川があって、少し移動すれば海がある。わずか半径10kmほどの地区に多様な自然が揃っているんですよ。ツアーやしているとき、私たちが話をしなくとも回りの自然が「間」を作ってくれる。素晴らしい場所です」。

近年力を入れているのは、地域に住む人たちとの交流と大人の居場所づくりです。「今、地域の子どもたちの送迎を手伝っているんだけど、地域の中での役割を見つけることが大切」と、高木さんは言います。今までの活動の中で培った地域との関わりを、より深めていきたいそうです。

※山村留学は現在(2006年度)は小学生2名が在籍。
※自然ガイドは現在4名(女3名、男1名)が研修中。



自然体験村 活動風景

黒松内ぶなの森自然学校

●E-mail buna_ns@d2.dion.ne.jp

●ホームページ http://www.d2.dion.ne.jp/~buna_ns/

●連絡先 〒048-0127 北海道寿都郡黒松内町南作開76 Tel. 0136-77-2012 Fax. 0136-77-2020



事務局長の高橋慎さん



※オオムラサキの希少性を知ってもらうため
絵本を刊行。

栗山オオムラサキの会

青紫色の美しい羽を持ち、日本の国蝶にも定められているオオムラサキが、栗山町の御大師山（おだいしやま）で発見されたのは1985年の夏のことでした。その後の研究で、栗山町はオオムラサキ生息の北東限地域であることが明らかになりました。このオオムラサキ生息地を、開発から守るために結成されたのが「栗山オオムラサキの会」。2006年3月現在会員数は26名です。

オオムラサキは、幼虫の時期にエゾエノキに住みつき、葉を食べて成長します。そこで、苗木を地域の家族に2~3年間育ててもらった後で植樹する「エゾエノキの里親制度」というユニークな方法を採用。これまでに延べ170家族が里親になり、500本のエゾエノキが植えられました。また、生態系のシステムを守るという観点から、雑木林の保護・育成にも取り組んでいます。これには、子どもたちが触れあえる生きものの体系を存続させる狙いもあります。

地域との交流を大切にする同会は、地元

講師を招き自然・歴史・文化等を学び、話し合う「ふれあいトーク」を開催しています。現在までに54回を数え参加者が100名程になることもあるそうです。「こだわりは講師を地元の人にお願いすること。自分の会だけでなく、周囲に呼びかけを行ってシェアを広げ、共に力をあわせて取り組むことが、活動を続ける秘訣です」と、事務局長の高橋さんはいいます。

栗山町は1988年に「蝶と緑の里プロジェクト」という長期計画を策定し、翌年には環境庁（当時）の「ふるさといきもの里」の指定を受けました。各団体が連携を取り、町を流れるハサンベツ川一帯に里山を再生するプロジェクトや、夕張川全体を見通して山から海までの水の循環のなかで人間が切断した区域をつなぐプロジェクトに取り組んでいます。高橋さんは「開発か保護かではなく、守るものは守る、復元するものは復元する、という考え方で活動することが大切。今後はオオムラサキだけでなく、人や生き物が共に暮らせる里づくりをしていきたい」と話してくれました。

●連絡先 <事務局> 〒069-1512 夕張郡栗山町松風4丁目10-10(高橋慎) TEL・FAX. 0123-72-0399